

社会発展に役立つ留学生教育

—帰国留学生を現地に訪ねて—

佐藤 進

目次

I 留学生の「来し方行く末」を知る必要

II 留学生の気持と社会変化の深い関係

III 筆者による現地訪問の事例

事例1. 海の彼方、時を隔てて息づく自学自習の精神

事例2. 元留学生の歴史的運命

事例3. 留学生と訪ねる「ふるさと」の変化

事例4. アジア経済危機下の新旧留学生

事例5. 日系企業を経営する元留学生たち

IV 批判的検討

1. 目の前の留学生を観察するだけでは不十分

2. 「来し方行く末」がわかりにくい理由

V 「留学生の来し方行く末」を知る方法

VI 社会発展の見地から見た日本留学の意義—発展途上国先進国化の先行例

VII 「牛に引かれて善光寺参り」—卒業生との相互教育の発展を

I 留学生の「来し方行く末」を知る必要

筆者は昨年3月まで京都大学経済学研究科・経済学部勤務していた。本稿はそこで筆者が11年半にわたって従事した留学生教育の経験の中から、その一断面（留学生と母国社会の発展の関連）を取り上げてまとめてみたものである。

私たち教育者（特に筆者のような現場の教師）は、外国から学びに来た学生たちの気持が本当にわかるようになりたいと願っている。彼らに対する教育の内容についても、彼らの身になってみて本当に役に立つものとは何かをいつも考えながら教育にあたっている。しかし、もしそう願うなら、彼らが育ったふるさとの地に足を運んでみるとか、彼らの先輩たちが卒業後にどのような活動をしているかを現地へ行って見てみる必要があるのではないか。また仮に行けないまでも、それくらいの思いをしながら現地について勉強することが必要ではないか。

筆者は留学生たちがどこから来たか、また就職した後、どのように生きているかに強い関心を抱き、機会を見つけては彼らが留学前に住んでいた場所、卒業して就職後に働いている土地まで出かけて、そこで彼らと顔を合わせ、様子を聞くようにしてきた。本報告では、その経験を紹介し、「出身地社会」の発展がどのように留学生に影響を及ぼしているか¹⁾を知る前提として現地を見学し、また「卒業後に留学生が国際社会でどのような役割を果たしているかを現地に出かけて実証的かつ系統的に調査し、そこから在学学生に対する留学生教育のあり方を見直してみる」ことを提唱する。

筆者は以下の文中においても「百聞は一見に如かず」として現地へ足を運ぶ必要を述べたが、それは、現地へ行くことが全てではないにしても、留学生について社会科学的角度からの理解が欠けている現状を認め、この現状を実践的・理論的に乗り越える必要があることを強調したためでもある。

II 留学生の気持と社会変化の深い関係

留学生の気持というものは、留学中である彼らの現況を観察した心理学的分析だけでは捉えきれないところがある。なぜなら、彼らの気持は社会環境の変化に根ざしていることが多く、社会環境の変化とは、直接には心理学の対象というよりも社会科学の対象であるからである。特に近年は、留学生の母国に劇的といつてよいほどの激しい社会変化が起きている。留学生に対する教育は、その変化を十分に視野に入れていないと有効なものにならないと思われる。教育に関する研究は心理学的方法によって行われるものが多いが、特に留学生の母国と留学先の国との発展程度が違い、そのうえ母国の発展のスピードが速い場合には、留学生の成長過程に及ぼすその影響を理解するために社会科学的方法が不可欠である。

例えば、上海から来た留学生は、10年前と今を比べるなら、はるかに日本人学生に近い意識を持つようになったといえるだろう。その理由は、上海の急速な経済発展が、上海の社会的環境を日本の社会的環境に急速に接近させているからである。すなわち、「経済発展」という角度から見なければ上海からの留学生の変化を十分に説明することは出来な

い。社会科学的に見てはじめて、社会発展の程度のちがいに起因する「異文化」も、社会発展段階の接近による「同文化」(=「共通文化」²⁾)化現象も理解することができるのである。

しかし、社会科学的地に立つ留学生教育または国際教育の研究が遅れているとしても、「習うより慣れよ」である。留学生の「身になって考える」ために私たちがなすべきことはほかにいろいろとあるとしても、彼らの育った地、働いている地に立ってみるならば、それは留学生の心境を知るために、「百聞は一見に如かず」ということわざのとおり、よい経験となるにちがいない。筆者は「留学生教育者の教育」のための最も有効な方法として、(「在学留学生のふるさと訪問」(後述)とともに)「帰国留学生を現地に訪ねる旅」を提唱するものである。

留学には大きな経済的動機があることを認めなければならない。日本への留学は、中国はじめ発展途上国からの多くの留学生にとって、日本で就職するか、日本企業の現地法人で働くことが、母国の企業等と比べてよりよい就職条件を約束するものとして期待されてきた。今日でも、日系企業への就職期待が日本留学の有力な動機となっていることに変わりはないだろう。しかし、90年代に日本経済が大きく停滞する一方で、中国は「世界の工場」と呼ばれるようになり、日本から中国をはじめとしてアジア諸国へ生産と資本が移るにしたがって、現地での新しい就職の可能性が広がり始めている。両社会の未来像についても、かつてとは180度ちがうイメージがメディア等によって描かれるようになった。学生たちはともかく、私たち教育者は、この変化の実態を正確かつ詳しく認識し、そのために具体的実地的な努力を払っているといえるだろうか？

III 筆者による訪問の事例

以下に筆者による帰国留学生訪問の一部について、具体例を紹介してみる。

筆者による訪問の件数は多いとはいえない。それは訪問のほとんどを自己負担で行わざるをえなかったからである。一年に海外まで何度も自費で行けるものではないし、行っても日数は限られる。にもかかわらず、ひとたび現地を旅してみれば、そこにおのずと社会発展の流れと、我が卒業生たちの生き様、すなわち、彼らの社会的な役立ちが浮き上がって見えてくる。紹介する事例は日本留学の経験を手がかり足がかりとして社会のさまざまな歴史的局面を生き抜く彼らの姿である。母国の他にも卒業生たちが多く活躍している「現地」はある。例えば東京がそれであって、筆者は上京するたびにできるだけ卒業生たちと会うことにしているが、日本国内で働く彼らの様子は当然母国でのそれとは違っている。その社会的役割の分析は母国でのそれとは独立して行うつもりであり、本稿では扱わない。

学生は就職すれば仕事に没頭しなければならず、こちらも時間と費用にきびしい制約がある旅先であり、互いにゆっくりと語り合うことはなかなか難しい。彼らが転勤や転職をすれば行方を見失ってしまうことも多い。数年間も交信が絶えるなら、連絡を取り直すこと自体が困難になる。卒業生の追跡調査は個人の力による調査・研究としては最初から大きな限界を余儀なくされているといえよう。にもかかわらず、その限界内の調査でも多くの教育的ヒントが見込まれるならば、あえてこれを追求すべきだと考える。

事例1. 海の彼方、時を隔てて息づく自学自習の精神

筆者が1993年に開催された「日本留学フェア」の機会を利用してジャカルタ（インドネシア）で呼びかけた京大同窓会の集まりのことである³⁾。急な呼びかけにもかかわらず、今でも日本語の達者な元「南方留学生」や「賠償留学生」、もっぱら英語だけで研究生活を送った70年代以降の留学生が日本料理店に集まって、京大当時を回顧するとともに、卒業後の苦労を語り合った。この会合でおたがいに初めて知り合うことになった同窓生も多かった。学部時代を京大で過ごし、その後米国などの大学院に進学した人もあった。現地での呼びかけ人になってもらったI氏（60年代、農学部卒業、ヨーロッパ系企業の経営者）の閉会あいさつ（要旨）を引用する。

「これまでの人生にはいくつかの重大な変わり目があった。新しい人生をつくり出す課題に直面するたびに、京大留学当時を思い出したものだ。京大で何を学んだかと問われるなら、それは『学ぶこと自体を学んだ』といえる。今回は京大から出かけてきていただいて、ありがたい出来事と思う。京大は我々をおぼえていてくれた。我々自身も、こうして初めてお互いに会う者も含めて、12人が心からの気持を語り合うことができた。そのなかでこれまで知らなかった、留学に関する歴史的事実を知ることができた。我々の集まりは小さくても、日伊親善に寄与することになるだろう。我々としても京大のPRをやっていくなくてはならないと思う。次回は私の家でやりましょう。」

筆者は、「社会に出てから役立つ大学教育」の内容を強く示唆する言葉としてここに掲げておきたい。それは京都大学において今も称揚され続けている「自学自習」の精神を表している。京都大学が安易な実用主義ではなく、自主的な勉学と研究の精神を学生に植え付け、それが場所的にも時間的にも離れていながら、いつまでも役立っていることを証明しているのである。筆者には現地に行き、初対面の卒業生たちと出会ってみて初めてわかった「発見」であった。

事例2. 元留学生の歴史的運命

留学生の祖父や父、叔父が日本へ留学したという留学生に出会うことはめずらしいことではない。しかし、1995年、解放50周年の年の中国では、他の年の訪問では聞けなかったかもしれないような多くの回顧談を聞くことになった。ふたりの在學生（当時）には、それぞれ戦中に日本の大学の医学部を卒業して医師になった祖父がいた（A氏とB氏としておこう）。両氏とも日本留学後は中国に帰国した。A氏の自宅を、中国派遣軍の高級幹部であった日本の軍人が、同窓のよしみでしばしば訪れていた。それが周囲の中国人に目撃されていた。戦後A氏は中国に住むことができなくなり、中国に住む子どもや孫たちと離れて現在も海外で暮らしている。しかし、この老人の子どもである在學生の母も、文化大革命時代にいわれなき迫害を受けて農村に追放され、そこで在學生を苦労の中で生み育てることになった。

もうひとりの在學生の祖父B氏は、中国帰国後に同じように日本の軍人たちに接近され、当時日本の占領地区だった海南島に移って開発に協力するよう依頼された。しかし、彼は

それに応ぜず逃亡した。戦後になって、愛国心とともに、彼の卓抜した医療技術が評価され、周囲の中国人から大きな崇拜を集めた結果、彼の家族も在学学生も、苦勞を知らずに生きることができた。

以上は、卒業生たちが日本への留学生であったがために、人生のある時期において（長かれ短かれ）辛酸をなめることになった事例である。留学生たちが将来とも日本への留学を誇りにしていくことができるためにも、我が国は侵略の愚を繰り返してはならない。

事例3. 留学生と訪ねる「ふるさと」の変化

筆者は、いつも機会さえあれば、留学生から彼らが生まれ育った環境と、現在その環境がどう変化しているかについて話を聞かせてもらうことにしている。しかし、彼らから聞き出すだけではどうしても分からないことも多い。その理由の多くは、筆者が彼らの育った所（「ふるさと」と呼ぶことにする）の様子をよく知らないからである。そこで彼らのふるさとに出かけて、この目で見てみたいと思うようになった。筆者はこの計画を昔から日本で行われてきた「家庭訪問」にひっかけて、「留学生のふるさと訪問」計画と名づけた。それ以来、筆者は留学生が帰省していれば彼らの案内で彼らの通った小中学校、彼らが遊んだ広場や公園を訪れ、場合によっては彼らが教わった先生と会い、そして彼らが道端で買い食いしたやきもちを買って一緒に食べる等の経験をしてきて、彼らの育った環境についてわずかな感覚でも得ようと努力してみた。特に「自己負担」を免れ、時間の余裕に恵まれた1995年の中国訪問の際には、多くの成果を得ることができた。

留学生のふるすとは、大都市である場合がほとんどである。したがって、そこには卒業留学生たちがすでに帰国して働いていることも多い。そこで、筆者は連絡が絶えていない限りは彼らと再会して旧交を温めながら、彼らの現状について教えてもらうことになる。こうした関係の中で筆者を介して卒業留学生同士が知り合いになり、進んで同窓会が出来るきっかけになったこともある。

1995年の訪問当時に筆者が上海や北京で見たものは、留学生の幼い頃の遊び場が急速に壊れてなくなる姿であった。留学生に歩きながら案内してもらう街から街が、都市再開発のために瓦礫そのものになっていることも珍しくなかった。どこの街でも留学生を見つけては昔の友達が訪ねて来るので、留学生の通訳で彼らと話をすることができた。商品相場に手を出して失敗してしまい、一文なしになってやり直している若い人もいた。また国営企業から良質の資材を持ち出し、特権を分与されて私営の企業をつくって大もうけをしている人もいた。まさに90年代は、中国をはじめとして、アジア諸国は社会環境が劇的な転換を迎えた時期だったといえそうである。そして、これこそは、かつて日本で我々が経験した高度経済成長がアジア規模で再現した姿にほかならない。中国の成長は当時の日本よりも複雑な形をとっているが⁴⁾。

中国を訪ねた後、台湾と韓国出身の学生がそれぞれに、「先生は世界中を見ているかもしれないが一番近くにある国を見ていないのではダメです、私が帰省している間に見に来て下さい、案内しますから」と言って案内してくれた。韓国では経済危機のもとで、元留学生諸君はそれぞれに腹をくくって生き抜いており（事例4. を参照）、台湾では当時、経済危機はそれほどひどくはなかったが、国民党一党支配が崩れる政治的変化が渦巻いて

いた。その変化に台湾の元日本留学生たちが巻き込まれ、政治的態度決定を迫られている様子を感じた。香港はイギリスから中国へ主権が移ると同時にアジア経済危機に見舞われ、日系企業が撤退あるいは事業を縮小する中で、元留学生たちは日系企業から欧米系企業、香港地元企業の対日販売責任者に鞍替えして、日本語、英語、中国語を駆使しながら活躍を続けていた。それぞれが日本で身につけた知識と経験をを生かすことによって、それなりに危機を切り抜けているのを見た。

事例4. アジア経済危機下の新旧留学生

90年代後半にアジア諸国を襲った経済危機は、卒業生たちの運命に深刻な影響を与えることになった。筆者は上記のように在学生、卒業生たちの親切な申し出を受けて、危機の余韻が残る香港、韓国、台湾を訪れ、卒業生たちの直面している大きな困難と、それにめげず活躍する彼らの姿をつぶさに見ることが出来たが、ちょうどその頃は、のちに留学生となって来日した子どもたちの家族が、家計の崩壊の中で塗炭の苦しみにあえいでいた時でもあった。中流サラリーマン、学校教師等々、比較的安定した家庭が次々と会社の倒産、首切り、退職金を運用していた株が無価値になる等によって経済的基礎を奪われ、子どもたちも皆アルバイトをし、家族全員が働いて生き延びたというのが、当時はめずらしくない出来事だった。のちになって、韓国人学生のために授業料免除や奨学金の推薦状を書くときには、必ずと言っていいほどこうした家庭状況が話題となった。「漢江の奇跡」と言われた高度成長の過程で財閥系企業への就職を競った発想は、当の財閥企業の破綻、その発想の担い手だった親の世代の経済的失敗によって権威を喪失してしまい、「国や会社には頼れない、頼るのは自分しかない」という発想が若い世代に行き渡るようになった。世代間に大きな意識のギャップが経済危機を境として生まれたのである。

母国へ帰国後、将来の経営者を夢見て財閥系企業に就職したとたんに、その企業が倒産してしまい、期待とは正反対に首切り反対の旗を手にするということになったという卒業生。せっかくめでたく博士号を取得して帰国し、財閥の調査部門に就職したのに、やらされるのは傘下企業のリストラを準備するための調査活動ばかりというケース。最後に、財閥系での仕事を見限って、日本での研修の経験を生かし自分で新しく会社を興そうとしている人。この元留学生は、筆者とは5年ぶりの再会だったが、筆者がソウルに来ていることが伝わると、筆者と昼食を共にするためだけに、プサンから数時間をかけて特急列車で駆けつけてきた。財閥系企業の販売責任者だった彼は、妻子を持ちながら思い切って自分の会社を興すことを決意していた。この出会いを筆者に対する新事業の説明と決意表明の機会にしたかっらしい。昼食が終わるとすぐその足で帰って行ったが、その後間もなく計画を実行に移したと聞いている。筆者は経済危機の脅威のもとで飛躍の意図を語った彼の気迫を忘れることができない。

事例5. 日系企業を経営する元留学生たち

①日本人経営者との入れ替わり

2001年の夏に筆者は再び上海を訪れた。

その前の年から、上海に帰った二人の元留学生が別々に、筆者に対して「招待」の声をかけてきていた。一人は「自分の会社を立ち上げたから」、もう一人は「日本の会社の現地法人で社長をしているから」、見に来てくれというのであった。私は招待を心から喜び、また感謝して出かけた。飛行機代もホテル代も私の自弁だったが。

二人ともそれぞれに留学当時は大変苦労を重ねており、来日したのが30歳に届く頃、妻は中国に残して、アルバイトをしながら、奨学金ももらえずといった状態だった。就職の時に希望していた大企業は面接を繰り返すばかりで内定通知をくれず、結局、中規模の企業に勤めることになった。筆者は現地で二人を引き合わせるようになった。一人は上海郊外にあって世界の企業が工場をおいている大工業団地、松江に工場を構えた日系メーカー現地法人の代表者となっていた。赴任してから数年も経たないのに、早くも工業団地の優秀経営者として表彰されていた。もう一人は上海市内にあるビルのフロアを買い取ってソフト開発会社を自分で設立して社長となり、ガラス張りの部屋を並べた中に大学を出て間もないスタッフとパソコンを収めて活発に働いていた。

二人の若い社長は、日本の大学を出た元留学生である他の社長や管理者も筆者に紹介してくれた。元留学生たちはそれぞれの職場をすべて私に見学させてくれ、昼食や夕食を共にしながら、多くの話を語ってくれた。筆者は彼らの活躍ぶりを直接見ながらさまざまな遠慮のない質問を出しては詳しい説明をしてもらうことができた。わずかな滞在期間にしては、他の立場の訪問者に比べて数倍のことを学んだと思う。

彼らはほとんどすべてとっていいほど、日本から注文を受けて生産する（事務部門—例えばソフトの開発のような—も含めて）会社の責任者だった。新たにつくった会社もあったが、その場合は元留学生が自分で会社を開いたものであり、多くはもともとあった日本の現地法人で、日本人社長が日本へ戻った後に抜擢されて現地のマネジャーとして赴任したものだ。日本人が経営していた時よりも経営は著しく改善され、製品の品質も同じものなら「純日本製」の水準を超えるとのことだった。この「日本人との入れ替わり」と、次に述べる「教育者としての役割」の2点こそ、筆者が強調したい留学生（卒業生）の今日の特徴である。

② 教育者としての経営者

「企業とは人類にとって理想的な公共の活動の場である。我々は物質の形態を変える活動の中で我々自身の価値とともに自然の価値について理解を深め、その活動を通して我々の生存環境を改善するのである。」（上海東洋炭素董事長 詹国彬氏—元留学生—が自ら書いた社是。）

元留学生経営者を訪ねる傍ら、筆者はある日本の大銀行上海支店支店長を訪ねてみた。日系企業の代表的存在として、また日系企業全般の状態を知る立場の人として訪問させてもらった。お目にかかってみると、先方は筆者自身の仕事(留学生教育)に強い関心を示され、日本の会社がWTO加盟後の中国で本格的に活動してゆくために中国人の人材が欠かせないが、その中で日本留学経験者が不可欠であるとのことだった。

上海で元留学生の若き経営者たち、日本人経営者、そして大学関係者などと、ひとわたり話し合ってみると、筆者はそこに共通のテーマが流れているのを感じた。それは、あら

ゆる事業において「教育」が非常に大きな意義を持っているということだった。例えば上海銀行の支店長は、「毎週1回従業員全体を集めて直接話をしているが、特に日本人と中国人のちがいについて話すことが多い」と言っていた。このことを元留学生の経営者に話してみたところ、彼らも同様な講話を毎週欠かさず行っているとのことだった。

結局の所、彼らが倦まずたゆまず中国人同胞に語っているのは、実は「資本主義とは何か」を教育しているのだと筆者には思えた。面白いのは日本人、中国人ともに「これだけ教育しても結局はよその会社（特に賃金の高い欧米の企業）に移ってしまう人も多い。しかしそれでもいいのではないかと割り切ることにしている。」と語っていたことであった。彼らは、すでに一企業の経営者を超えた発想と行動をしているのである。そこには、中国のため、中国の人々のために自分たちは働くのだという動機がうかがえる。「世のため人のため」という動機は、教育本来の動機である。筆者は彼らが今日の中国社会において進歩的役割を果たす意識を持ち、また働く意義をそこに求めているからこそ、よく中国人従業員を束ねているのではないかと見ている。彼らはビジネスマンではあるが、一面において、知らず知らずの内に、教育者としても働いているのである。すなわち日本における国際教育は（特に理論としてまとまったものはないままに、実践のみが活発に展開されているのであるが）中国の地において生きていることを認めなければならない。

IV 批判的検討

1. 目の前の留学生を観察するだけでは不十分

II. に述べたような角度から捉える（学生がどこから来てどこへ向かおうとしているか、いわば社会変化の流れの中に学生たちを置いて考える）方法は、留学生自身が誰でも実際に行っている思考方法である。ところが留学生たちの「来し方行く末」について社会との関連において強い関心を持って見守っている教育者は決して多くない。たいていの教育者にとっては、個々の学生は大学に在籍する数ある学生の一人に過ぎない。すなわち、「一般（日本人）」学生に対する留学生として、留学生の中では国費・私費、漢字圏・非漢字圏等によって異なった対象として、実務的対応に必要な限りで区分するにとどまり、**留学生について現在目に見える状態以上には考えを及ぼさない傾向にある**。しかし、それだけでは留学生を「異文化学生」として特別扱いするに過ぎないことになり、彼らが日本へ留学してくる以前から持っている力を生かし、留学の間にその力をさらに増やし幅を広げ、将来に社会に真に役立ってもらうことを狙いとする、一連の流れの中に留学生の成長を捉える教育とはなりにくい⁵⁾。

生徒たちの現在と将来の可能性を追求する教育という点では、概していえば大学の先生と比べて初等・中等教育の先生のほうがよほど進んでいる。彼らは必ずといっていいほど、「進路指導」に携わらなければならない。そこで教員は、個々の生徒にとって切実で最も重大な課題である進学、就職の問題とともに、社会との関わり方を主たる内容とする「人の生き方」という問題に生徒たちと一緒に直面させられるのである⁶⁾。それに対して大学の教育は、「もう大人だから」と称して、上記の最も切実な問題を事実上無視するか回避する結果になっていることが多い。大学生たちは、初等中等教育時代に夢見てきた

ことを実現しなければならない最後の段階、いわば仕上げの段階としていちばん深刻な段階にあるのに、大学教育は彼らの将来に対して知らぬ顔をしている。学生たちもまた、大学には期待しなくなっている。私学には就職担当部があって学生たちの就職の世話を力を入れている。私学（だけでなくこれからは国公立も同様）が生き残るためには、「就職に強い大学」というイメージを作らなければならないからでもある。同じ必要から教育内容も資格取得に直結する方向で強化される傾向にある。しかし、それだけでは専門家養成というにはまだほど遠い、中途半端な現状といわざるをえない。

学生たちにとって「未来」の問題とは生き方の問題すなわち社会の中に自らをどう生かすかという問題であり、単にどこかの会社に就職できればいいという問題に留まるものではない。

2. 「来し方行く末」がわかりにくい理由

なぜ教育者は学生達の「来し方行く末」に強い関心を持ってないのであろうか。（大学の指導教官の中には、個々には留学生担当教官をしのぐ熱意で留学生の指導に当たり、留学生の進路についても出来る限りの配慮を尽くしている先生たちがいる。その数を合わせれば少なくないかもしれないが、大学全体の中では、やはり彼らは例外的な存在である。）

それは、第一に、関心の有無以前に、学生たちの「来し方」に存在し、また「行く末」に横たわる生活条件・生活環境、広くは社会条件について、あまりよく知らないためと思われる。一例を挙げれば、留学生担当者には、「日本留学フェア」への参加など、ごく限られた場合を除いて留学生の母国を直接見学する機会がない。

第二の問題として、留学生を受け入れる先進国には伝統的に以下のような考え方があって、それに影響されているからである。すなわち、留学生にとって先進国の文化を吸収するのが留学の目的であるとすれば、彼らを教育する教員が留学生の国に身を置いてみて、「その国なりの」発展を研究するような必要はない。留学生とは先進国に留学している間の存在であるからには、日本人学生と比べた留学生の特殊性とは、その心理的特徴以外にない。したがって、留学生教育は留学生の心理面に関心を限定すれば足りる。このように、心理学的国際教育論は、ともすれば先進国の状況を先験的に理想化することによって、発展途上国の実情を度外視または捨象しがちなことに注意しなければならない。

第三の問題として、受け入れ国側にある時代遅れの国際感覚を挙げておく。その一例は、先進国の発展が停滞しているうちに留学生の母国である発展途上国が急速な発展をしながら、ある側面において受け入れ国を抜くようになっていくとか、ほかならぬ受け入れ国の資本が大挙して留学生母国へ向かっている等の新たに深刻化している事実に対して、教育者が無感覚であるような場合である。こうした場合には、留学生にとって教育者は、「教えてあげる相手」になることがあるかもしれないが、到底「教えてもらう相手」ではあり得ない。しかも現実にかような場合は珍しいものではないのである。

留学生たちは母国に帰る都度、家族や友人と会い、ふるさとの変化を実感する。それなのに、大学の側に同じ事実に関する探求心がなければ、大学は学生にとって相談の相手になるはずがない。しかし、ともかく、百聞は一見に如かず。学ぶためには、教育者がまずは経験・体験することである。

V 「留学生の来し方行く末」を知る方法

では学生達の進路について相談に乗れる程度の基礎的な知識を身につけるには、どうしたらいいのだろうか。筆者はここに三つのことを提案したい。

- ①学生たち自身から教えてもらう。
- ②卒業生たち自身から教えてもらう。
- ③それもできるだけ現地に行って教えてもらう。

念のためにいうが、「教えてもらう」といっても、アンケートでよくある問いかけのように、学生たちまたは卒業生たちに対して、大学教育改革への意見や提案を求めることではない。そうではなくて、卒業生たちが現にいま、どのように社会に生かされて、役だっているかということ調べるのが先決なのである。在学生に対して彼らの将来について聞くのにも意味がある。というのは、彼らは自分のために卒業後にどこへ行ったらよいかを日々考え、関連した事柄について調査・研究しているからである。

なぜ私達は、教員でありながら、彼らから「教えてもら」わなければならないのだろうか。それは現在の社会環境の変化が激しすぎて、当事者でなければわからないことが多いからである。私たちはここでは事実について教えを受けながら、留学生とともに彼らの成長の経路を見いだそうとするのであるが、実際には、次に示すように、当事者である留学生自身でさえも事態の変化に立ち後れることが多いのである。

筆者は留学生が帰省するときには、必ずといっていいくらい、「ふるさとの社会・経済の変化をよく観察してきてごらん、それが大事な勉強だ」とアドバイスすることになっている。帰ってくると、「どうだった」と尋ねる。彼らの答えによくあるのは、「久しぶりに帰ったら、周囲が変わってしまって、我が家がどこにあるのかわからなかった」という返事である。つい先日も、ある学生が筆者の所へ来て、「上海の家の近くに古井戸があった。底の水は夏には冷たくてスイカを冷やすのにちょうど良く、冬には温かくて、皆に愛されていた。それなのに、高層ビルがその上に建つというので埋められてしまった。」と怒っていた。古井戸とともに、この学生が育った地域コミュニティも崩れたのである。このように、留学生自身でさえ、留学している間に「時代遅れ」になることが珍しくない。

VI 社会発展の見地から見た日本留学の意義—発展途上国先進国化の先行例

日本が受け入れている留学生の大部分はアジア諸国から来ている。そのアジア諸国は、今日急激な変化の中にある。変化を速める今の時代に教育者は取り残されがちである⁷⁾。その変化は、年ごとに国際的關係が強まる中で進行している。留学生は変化の主導的な担い手として働くことにより21世紀の社会建設にも大きな役割を果たすことになる。留学生教育の目的がここにあるとすれば、日本留学には、発展途上国から来た留学生たちにとってかならず役立つものがある。その理由は次のとおりである。

明治維新以来、日本は、発展途上国が先進国入りをするという世界史的な事例となった。以来日本は、さまざまな分野において、後発の発展途上国にとって（「模範」としてであれ「反面教師」としてであれ）先行例として不可欠の研究対象であり続けている。「先行」

の内容は時代とともに変る（例：清国派遣留学生にとっては「革命」としての明治維新そのものが中国の学ぶべき先行事例となった）。その後も今日に至るまで日本は多くの先行事例を提供している（例：高度経済成長）。発展途上国の学生にとってはもちろん、また発展途上国を研究しようとする先進国の学生にとっても、日本史の研究は必須である。また、日本への留学生は、「先行事例」を文化として、意識的・無意識的に吸収している。日本における国際教育の実践家・研究者が、日本文化を「吸った」留学生たちのその後に関心を持つのは、日本の先行例がどのように他国で生かされるかに関心を持つからでもある。

90年代以来、日本経済は停滞と不況から脱することができないでいる。それどころか、他の先進国同様またはそれ以上に、大きな行き詰まりに直面している。この行き詰まりは、高度成長を成し遂げて共通のグローバル資本主義に組み込まれた留学生の母国の経済を「巻き添え」にしている。今日の留学生たちは、母国の将来のためにも、日本で吸収すべき新たな課題である「行き詰まり」（高度経済成長の帰結）の研究に直面させられているともいえる。

日本における留学生教育の社会的課題を以上のように設定してみたときに、自ずと問われるのは、留学生の母国が実際にいかなる発展状況になっているのか、また我が卒業生たちがその発展にどのように貢献をしているかを、はたして我々教育者が知っているかということである。

Ⅶ 「牛に引かれて善光寺参り」—卒業生との相互教育の発展を

「私が工場をつくったら先生に見に来てもらう。」留学生がこのように言うことがあるが、こんなにうれしい誘いはない。卒業生に呼んでもらって学びに行く。それは教師冥利に尽きることである。先に紹介した事例5は、卒業生たちと連携し、「教育者の再教育」、「卒業生の教育者的役割」という新たな内容を含む彼らとの相互教育の将来的可能性を示唆するものとして、特に詳しく紹介してみた。卒業生とのつながりは、相互に社会発展によりよく貢献できるための、研究仲間として発展することが望ましい。そこから得られた知見を卒業生は彼ら自身の活躍の舞台に生かすだろうし、私たちは在学学生に対する教育に生かせばよい。

私たちは留学生が日本留学の成果を生かして母国と国際社会で社会発展を担うリーダー、教師として活躍するにふさわしく育て上げなければならない。それだけのレベルの高い教育を行うことが私たちに求められている。そのためには、留学生に負けず劣らず、私たち教育者自身が彼らの母国の発展（それと日本との関係）について学ばなければならない。その一つの重要な方法として、卒業生たちとよい関係を保ち、彼らからも、いつまでも謙虚に学び続けていきたいものである。

（以上は2001年12月 留学生教育学会研究大会において報告した『『帰国留学生を現地に訪ねる旅』の提唱』に加筆したものである。）

注

- 1) 拙稿『未来に生きる君たちと—留学生教育論に寄せて』京都大学経済学部、1992年。
- 2) 同上
- 3) 本件については拙稿「京大は我々をおぼえてくれた—ジャカルタでの卒業留学生との集い」(『留学交流』vol.5 no.8 1993.)に詳しく報告した。
- 4) 中国経済は(ベトナム経済も)、総体としては、民営の資本主義経済部門の他に国営部門、農民経済部門、少数民族の自給自足部門等それぞれ歴史的 성격の異なる大きな諸部門を含む「過渡期経済」として、日本ばかりでなく韓国等其他のアジア諸国の経済とも区別される。
- 5) 留学生たちは次のようなアイデンティティ(個性)形成の一連の流れの中で成長している。(拙稿「学生の経済的経験を考える—経済学教育を受ける主体的前提について」『京都大学経済論叢』別冊『調査と研究』第19号、2000年。)
 - ①日本へ来る前にいかなる環境で育て自分の個性を育んだか
 - ②留学中に自分の個性を生かしながらどのように新たな個性を身につけ、
 - ③卒業してからどこでどのように自分の個性を生かし社会に貢献しようとしているか。最終的には④=「未来をどう構想するか」が、卒業後の人生を決めることになる。②は③のためであり、②と③は、留学生自身が我々の目の前で日々切実に考えていることである。留学生はいつも「未来に生きている」ことを忘れてはならない。
しかし、私たちは、留学生たちが②と③を行うのを助けるために、留学生がまず自分の個性を築いたその環境について知る必要がある。①ふるさとの様子のことである。①が分かり、初めて②と③が分かるという関係にある。ところで、ふるさとの環境は、留学生自身にとってはすでに自分のアイデンティティとして身につけてしまっている過去の事実なので、自分の潜在意識に潜んではいても取り立てて知りたい事柄ではない。それに対して、教育者にとっては、留学生の心の中にある「ふるさと」はこれを顕在化させて理解してみなければ、留学生を十分にそのまわりの社会的成長過程において理解したことにはならない。また留学生にとっても、「ふるさと」を客観化して理解し、自分の社会的役割が発生する基盤を自覚すること、そういう意味において「自らを知る」ことに留学の重要な意義がある。(拙稿「国際教育のエネルギーはどこから来るか—留学生による講演会シリーズ『世界からの手紙』の実践にもとづいて」『経済学教育』第19号、2000年。)
- 6) 拙稿「新聞を使って学ぶ経済学—実事求是のトレーニング」『経済学教育』第20号、2001年に筆者の留学生クラスを「体験学習」した熊本高校1年生の感想文を紹介した。高校生たちが大学に、また自分自身の将来に何を期待しているかを真摯に語っているので参照していただきたい。
- 7) 拙稿「留学生教育とはなにか—その専門性と役割について」『留学生教育』創刊号、1997年。